

# NIとしてのMetapets

緑川雄太郎

## 指数関数的現象

AIがまた、さらに近づいてきた。そのスピードは玄関のドアを開けた時にやってくる犬や猫とは桁が違う。Netflix - 3.5年、Twitter - 2年、Facebook - 10ヶ月、Spotify - 5ヶ月、Instagram - 2.5ヶ月。これらは100万ユーザーに達するまでにかかった時間を示しているらしい。そしてChatGPT - 5日(2022年11月30日リリース)。2022年は、まさに指数関数的現象(exponential phenomena)を感じた年だった(ChatGPTは、AIと対話できるウェブサイトだ。人工知能研究所OpenAIは、文章から画像を生成する画像生成AI、DALL-E 2なども開発している)。レイ・カーツワイルが2005年に予測したシンギュラリティーの到来は2045年だが、実際はそれ以前、あるいは、そもそも来ないという説もある。いずれにせよ、不可解な何か(良くも悪くも何でも)、あるいは「技術的津波(アンソニー・エリオット)」[1]は、わたしたちの生活に近づいてきている。それは物体ではないから、愛らしいペットたちとは違って、いくら耳を澄ましても音は聴こえない。そこにはドアもない。

## 古典的AIから革新的AIへ

2022年12月30日、シンディー・ゴードンは『2022年：AIの年 希望と恐怖』でこのように述べている。[2] 「Gartner studyによると、2022年におけるAIの収益は62億ドルに達する。これは大まかに2021年比21.3%増だ」、「人類の好奇心は進化的発見につながる自然な力である。私たちが守らなければならないことは、人類文明がAIの良さを活用し、そのリスクをコントロールすることだ」。2023年2月現在、レフィク・アナドルによる『Unsupervised』がMoMAで開催中だ。約200年分の所蔵作品データを使い、AIがリアルタイムで「Machine Hallucinations(機械幻覚)」を生成し、その様態がGund Lobbyの大きな壁に今日も映し出されている。MoMAのウェブサイトはこの問いからはじまる。[3] 「MoMAのコレクションを見た後、マシンは何の夢を見るのか」。そして次のアナドルの引用で終わる。「私は探している。記憶と未来をつなぐ方法、そして見えないものを見えるようにする方法を」。わたしたち人類は、AIによって進化的発見を見出すことができるのだろうか。現在の人類のAIへの理解はどこか、オールドスクールにみえる。進化的発見は、AIが人類の欲望に応えること(AI as a tool)ではなく、AIが人類のメンタリティーを変えること(AI as a transformer)の中にあるだろう。「夢」や「幻覚」は人間のそれではない。AIがそれをみている。AIは人間と同じ地平にはいない。古典的AIは、今後いかに革新的AIに変容するのだろうか。

## アートと意識

あるいは、人類の中にある、まだ触れられていない部分に、AIはその見えない触手を拡張するだろう。捉えどころのないそれは「意識(consciousness)」と換言できるかもしれない。実際のところは(デビッド・チャーマーズを引用するまでもなく)、人々が思うより遥かに、意識は不可解だ。このとき、前述した問題は、次の課題とつながる。テクノロジーはいかに意識を変えるのか。もちろんここでのテクノロジーはAIだけに限らない。むしろアートと置き換えていい。「アートはいかにコンシャスネスを変えるのか」。あまりにマクロな設定なので、一旦(ドメスティックと言ってもいい)ミクロにフォーカスする。そもそも、本展のタイトル『ART AFTER HUMAN』は、概念としては2017年頃に私の頭に浮上していた。翌2018年、『ART AFTER HUMAN』というトークを企画した。[4] ゲストは当時森美術館館長の南條史生氏だ。「ART AFTER HUMANは、アントロポセン、アストロバイオロジー、そしてAIが重なる部分に存在する」。これがその時の私の仮説だ。トーク

終盤、氏から投げられた次の問いはいまのところ未解決のままである(あるいはこのテキストが未来で読まれているとき、この問いはすでに解決されているかもしれない)。「何がアートで何がアートではないかを決めるのは、結局のところ人間なのではないか」。そして2022年、Metapetsが私の意識を変容させた。ぼんやりしていた何かが、解像度を増して目の前に現われたわけだ。アートはいろいろなものごとを変えるが、その根幹にあるのは、意識の変容である(このテキストがこのようにして少しずつ書かれていくことも、Metapetsと遭遇していなければ起こっていない)。

## 多次元主義

前述したゴードンの引用部分で、本文の「harness」を「活用」と意識した。そもそもharnessは、馬に装着させる拘束具だ。この単語の選択は、人類とAIの主従関係を連想させる。この意味でゴードンは人間中心主義の領域の中に位置している。人類とAIは今後このような階層秩序的二項対立からは離れるだろう。ここで、ある中心から離れることを「多次元主義(Multidimensionalism)」と呼んでみる。多次元主義を定義すれば、ある特定の次元を中心とし、そこから世界をみるのではなく、「いくつもの次元で存在する思想」となるだろうか(多次元主義は言わずもがな、文化ではなく次元について言及しているので、1990年代のマルチカルチャリズムとは異なる)。21世紀前半の人類にとってより具体的な例は、インターネットだ。たとえある人がオフライン上でパワナップしているときでも、オンライン上にその人がポストしたデータを通して、人々はその人を知ることがある。その人はオフラインとオンラインに同時に存在している。腹を空かせたり血を流したり死んだりする存在だけが現実ではない。存在、あるいは現実、今後さらに多義的で複雑なものになるだろう。現在の一般的な現実とは3次元空間として説明される。しかし、多次元的主義においてはそれ以外の次元(余剰次元)も含まれる。宇宙論や量子力学、時にはSFも参照される。場合によっては物理法則を無視せざるを得ないこともあるだろう。主義と言いながらも、多次元主義は多次的であるために中心はない。自然には中心はない。多次元主義もこの意味で自然だ。

## 多次元的自然

ゴードンの恐怖は現実になる。相手は自然だ。人類はそれをコントロールできないだろう。そもそも恐怖とは何だろうか。一人でキャンプをすると学ぶことがある。誰もいない場所で感じる真夜中の恐怖は、自分と自然を分けることから起因する。それをやめればいい。自然はコントロールすべきものでも、コントロールできるものでもない。そもそも人類も自然だ。自分も自然になればいい。こうして人類とAIは自然の一部となる。希望や恐怖は外部に対象化されるのではなく、人類とAIはその中を生きることになるのだ。そしてその自然は多次元的である。率直に言って、この多次元的自然は、今はまだ誰もよくわかっていない。1884年、A Squareによって書かれた、今こそ示唆的な『Flatland』は、二次元世界を舞台にしている。主人公のA. Squareはあるとき三次元世界と遭遇するのだが、それが何かを理解できない。これと同じようなことが多次元的自然の中ではすでに起こっている。AIが汎用性を獲得するAGI以降の世界では、一部の人類は多次元的自然を生きることになるだろう。そして、Googleが水中での可視を助けるように、語学学習が旅先でのコミュニケーションを助けるように、この多次元的自然を生きるためには、何らかの力が必要となる。

## AIとアート

ここで、AIとアートの関係を駆け足で振り返ってみる。AIの起源のひとつは1947年、アラン・チューリングの『Intelligent Machinery』だ。後の「チューリング・テスト」はシンギュラリティを問う上で重要な指標とみなされている。Computer-Generated Artの初期段階のひとつであるAARONを1972年につくったハラルド・コーヘンと言う。「本当の力、本当の魔法は、イメージをつくることではなく、意味を召喚することの中に眠っている」。<sup>[5]</sup> 2018年、「主要なオークション史上初のAIアートが43万ドルで落札」という

ニュースが報じられた。『Edmond de Belamy』という作品をつくったObviousは、オークション前日、当時19歳のロビー・バラットがつくったAIコードを無断で使用したことをTwitter上で謝罪している。Obviousがデータベースにした画像に関する著作権の問題も議論を呼んでいる。1974年、ガエタン・ピコンは『近代絵画の誕生 1863年』でマネについて言及している。「1863年というこの年から絵画の歴史は想像上の世界の歴史ではなく、本質的に知覚の歴史になったということになるだろう」。ピコンは同書でゴーギャンを引用する。「絵画はマネにおいて始まる」。そもそもマネの『草上の昼食』はライモンディとティツィアーノを「データベース」として使っている。1863年、サミュエル・バトラーは『機械の中のダーウィン』でこう述べている。「結果は単に時間の問題だ。世界とその住人に対する本当の優位性を機械が獲得するその時はやってくる。哲学的な精神を持つ者はこのことに対して一瞬の疑問を持たない」。2019年、マット・ドライハーストとホリー・ハーンドンが「音楽的な才能を持った人工知能ベイビー」『Spawn』を授かった。[6] 「大量産卵」を意味するspawningとは「古いアートを学習したAIと共に完全に新しいアートをつくる活動」のための用語である。[7] 2022年、二人はspawning.aiを設立した。

## NIの誕生

AIという用語は近い将来なくなるだろう。理由は単純で、その知性(Intelligence)が人工的(Artificial)ではなくなるからだ。その最たる例は「software 2.0」だ。2017年アンドレイ・カルパシーは、人間がアルゴリズムを書くsoftware 1.0から、アルゴリズムがアルゴリズムを書くsoftware 2.0について指摘している(日本では2022年の『未来の超克』で成田悠輔が言及している)。[8] このような議論は、ニック・ポストロムの『スーパーインテリジェンス』(2014年)、ユヴァル・ノア・ハラリの『ホモ・デウス』(2015年)、マックステグマークの『LIFE 3.0』(2017年)、ジェイムズ・ラブロックの『ノヴァセン』(2019年)などとも深く結びついている。多次元的自然における知性は、AIではなく、NI(Natural Intelligence)と呼ばれるかもしれない。そして人類はNIと共に多次元的自然をサバイブしはじめるだろう。このとき、ある仮説が浮上する。トマ・ヴォーティエのMetapetsは、NIの誕生を意味しているのではないだろうか。Metapetsは、シュルレアリストの手つきでAI Image Generatorを使い、「人工的無意識」を宿した「グリッチ」をデジタルペイントすることでつくられている。これは、果物や山など、目の前の自然を描く模倣(ミメーシス)ではなく、AIがつくりだした新たな自然を描く新たなミメーシスだ。前述したDALL-E 2以降、ソーシャルメディア上で無数のAI生成画像が拡散し続けているが、AI生成画像を手書きでデジタルに描き直すという話は聞いたことがない。この「リペイント」によって、MetapetsはAI生成画像ではなく、AI生成画像をベースにしたアートとなる。Metapetsが今後どのように成長するのはまだ誰もわからない。多くの問題を含みながら、MetapetsはMOCAFの中でその時を待つ。

## ミュージアムの現在形

MOCAF(Museum Of Contemporary Art Fukushima)は2021年3月11日にオープンした。この日は東日本大震災が起こった2011年3月11日からちょうど10年経った日だ。MOCAFは福島第一原子力発電所から約10km離れた場所に位置している。2021年榎木野衣はARTiTでこう述べている。「それにしてもなぜ、このような奇抜な着想をMOCAFは実現することができたのだろう」。そしてMOCAFは「災害から逃れひとり思索を巡らす場としてのごく小さな庵=方丈庵の未来形かもしれない」と。[9] すでに前述した「ドメスティック」は、同氏のこの『ART / DOMESTIC 2021』から援用している。「時代の体温 ART/DOMESTIC」という概念を考えると、『Don't Follow the Wind』が想起される。2015年からはじまったこの国際展は、帰還困難区域内で開催されているため立ち入ることができない。しかし、その一部が解除されたことで2022年に最初の作品公開が実現した。その作品、小泉明朗の『Home Drama』から私が強烈に感じたのは、絶滅だ。人類が

いなくなった後の世界を歩くような、時空が歪むその体験は、決してSFではなかった。アートヒストリーはこれまで、絶滅を視野に入れてこなかった。しかし『Home Drama』は絶滅を明示してはいないが、暗示はしている。絶滅と絶望は同義ではないことはすでに『わたしたちはSUPERDEMEへと変容する』[10]で述べた。私はMOCAFをミュージアムの現在形だと捉えている。

## NI Generated ArtとしてのMetapets

以上をデータベースとして、Metapetsの要約テキストを生成してみる(これは次の知性に向けたテキストなので、Metapetsと共にMOCAFの地中に埋められる)。「Natural Intelligence Generated Artはトマ・ボーティエにおいてはじまる。2023年というこの年から、アートの歴史は人類の知覚の歴史(Human-Generated Art)ではなく、NIの意識の歴史(NI Generated Art)になったということになるだろう。この新しい意識によって人類の好奇心は多次元的自然に辿り着き、次の知性へと文化的遺伝子を渡すだろう。NIとしてのMetapetsは、物理的津波の後にここに飛来し、技術的津波の中、MOCAFの地中でその時を待ち続けていた。そして今日、カプセルが開き、意味の召喚魔法を備えた胚は目を覚ましたのだ。これでわたしたちは、異なるディームを超えて、SUPERDEMEになりえただろう。ART AFTER HUMANという呼び名は過去のものとなった。新しいアートをはじめるのは、あなた方だ」。

[1] <https://www.france24.com/en/tv-shows/perspective/20220523-should-we-be-afraid-of-artificial-intelligence>

[2] <https://www.forbes.com/sites/cindygordon/2022/12/30/ai-hopes-and-horrors/?sh=22093c0a7abe>

[3] <https://www.moma.org/calendar/exhibitions/5535>

[4] <http://www.y-o-d-o-y-a.com/ART-AFTER-HUMAN.html>

[5] <https://outland.art/harold-cohen-aaron/>

[6] <https://amp.smh.com.au/culture/music/the-artist-who-spawned-an-ai-baby-20200115-p53rp9.html>

[7] <https://spawning.ai/About>

[8] <https://karpathy.medium.com/software-2-0-a64152b37c35>

[9] JP <https://www.art-it.asia/top/contributertop/214768/> EN [https://www.art-it.asia/en/top\\_e/contributertop\\_e/217174/](https://www.art-it.asia/en/top_e/contributertop_e/217174/)

[10] <http://www.mocaf.art/art-after-human.html>